NEW

Holbein

ホルベイン工業株式会社
東京都豊島区東池袋2-18-4
TEL.03(3983)9251
大阪府東大阪市上小阪1-3-20
TEL.06(6723)1554
www.holbein-works.co.jp

アーティストレベルの水可溶性油絵具としてリニューアルしたホルベイン「デュオ」。より専門アーティストからの声に応えたカラーラインアップが図られた。従来から親しまれてきた色名に戻し、色によっては新たに顔料から見直して処方の改良も行なった。さらに、カドミウム系やコバルト系の色も追加。透明色から不透明色まで、全100色が勢ぞろいしたのだ。もちろん、油絵具でありながら水に溶ける。

他の絵具と併用して絵画の技法が大きく拡がる。また、溶剤のアレルギー問題も一掃。表現の可能性までグレードアップした。

水で描ける——次世代油絵具

アクアオイルカラー「デュオ」

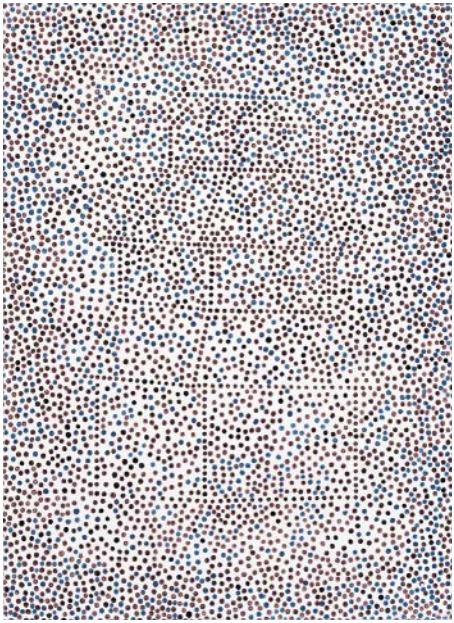
色のグレードアップという、進化。

法貴信也

偉大なる断絶と恐るべき創造

中井康之=文
Text by Yasuyuki Nakai

2003年、広島市現代美術館「絵画新世紀」展会場にて自作を前に、やはり出品者の福井篤氏（右）とツーショット



無題　2000　キャンバスに油彩　45.5×33.4㎝　個人蔵

2000

「黒い点々を長い間見ていると、茶色と、黒に近い紺のような青との2色に分かれて見えてくるんです。この絵は、黒が最初に分離する色について描いたものです」

いつの時代でも、世代交代という状況は訪れる。それが日常的な所作であれば、引き継がれていくことも多いはずである。しかし、近代以降の芸術分野においては、批判的な継承という態度が正しいものとされてきた。今回の法貴との会話を顧みると、この命題の強度が試されているような気がした。というのは、法貴の制作には、そのような継承ではなく、偉大なる断絶と恐るべき創造とでも言えるような行為が営まれていると考えられたからである。

法貴の幼少期には、典型的な多くの作家に見られる成功体験はなかった。母親が勤め先から貰いうけてきた青焼き用紙の裏を使い、毎日のように「落書き」を繰り返していたという。それが、法貴にとっての〝レッスン1〟になるのかもしれないが、膨大な量の「落書き」は、ほとんど現存せず、それが現在の法貴をつくり出したのか否か、検証する術（すべ）はない。単に

2005 「輪郭は実際には色を持っていない。そうした、固有色を使えないところで色を選んでいるんです」

無題　2005　アルミ積層複合材に油彩　53×41㎝　個人蔵

線描表現ということで結びつけるのが直截的過ぎることは言うまでもないが、その「落書き」行為によるポジティブな反応や結果も、残念ながらなかったようである。

もちろん、法貴も普通に美術大学を卒業している。ただし、彼が美術大学を希望したのは、2つ年上の兄が美術大学に進学し、よい意味で性格が激変したことがきっかけとなっている。いわゆる研究所ではなく、お絵描き教室のような場所で受験勉強の多くの時間を過ごした法貴が、二浪で京都市立芸術大学に入学した時に背負ったのは、様々な意味での劣等感であった。京都芸大に入学してくる者は成功体験を重ね、その体験を基に芸術的教養にも恵まれている者が大多数である。そのような状況下、法貴が選択した行為はひたすら描くことであった。遅れを取り戻すかのようにひたすら描き続けて大学院にまで進み、そこで渡辺恂三（じゅんぞう）という教師と出会う。強烈な個性を持つ作家の下で学びながら、いかにその影響から逃れることができるか、という顛倒（てんとう）した行為を自らに課し、大学院の2年間を過ごした。例えば、指導を受けている際に「ここは青より赤がいいと言われたら、青をやる」という発言は笑いを誘うようなエピソードであるが、そのような強迫観念にとらわれながらも、ひとつの円熟した画家の感性を対蹠的（たいせきてき）に分析するという不思議な〝レッスン2〟を実践していたようだ。

このようななかで、法貴自身のスタイルを獲得するための研究が始められていた。それはあるイメージを描きながらも、その画像（イメージ）に付与した象徴的な意味を完全に排除する、という無謀な試みであった。画像に付与した意味性というのは、絵画史の中では近代以降否定され、近代的な生活を描くことから始まり、線や色自体の表現に到達したわけであるが、画像を用いながら、そこから連想され

無題　2008　アルミ積層複合材に油彩　直径50㎝　個人蔵

2009

「初期衝動を
維持したまま、造形として
ロジカルなものを
組み上げていきたいと
思っています」

る象徴的な意味まで完全に排除しようとした者はいなかったであろう。というか、それは鑑賞する側の認識に関わることでもあり、通常の手段ではそれを完全に行うのは極めて困難である。また、もしそれが可能となったとしても、その絵画が果たして絵画として意味を持つのか、という新たな問題を生み出すだろう。実際、法貴が試みた様々な方法、画像を多用して意味を飽和状態にする、画像を極端に拡大することによって無意味化を図る、（これはリヒターが行っているが）筆触をなくして写真をそのまま引き写す、関連のない事物を併置する（法貴自身、それが「デペイズマン」という手法であることを後に自認するにいたる）等々、ことごとく失敗を重ねたようだ。

ある時、法貴は1枚のドローイングを見て、自分が求めていた意味性が排除された具象的イメージの表現の可能性を見出す。それは遠くのものが強く描かれることによって遠近感に違和感を生じさせた、ふたつのパースペクティブが混淆（こんとん）としたような画であった。そうした表現に対し、法貴は「単層の多層化」という名称を付与し、

無題　2008　アルミ積層複合材に油彩　162×112㎝

ほうき・のぶや

1966年京都生まれ。京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。個展にONギャラリー（大阪、91、92、98年）、ギャラリー白（大阪、93年）、TARO NASU（東京、2002、05年）、ルター教会（ケルン、独、03年）、I-20Gallery（NY、米、04年）NADiffギャラリー（東京、04年）ほか。グループ展に02年「VOCA」展（上野の森美術館、東京）、「エモーショナル・サイト」展（食糧ビル、東京）、03年「絵画新世紀」展（広島市現代美術館）、「スロー・ペインティング」展（大和ラヂエーター・ビューイングルーム、広島）、04年「Officina Asia」展（ボローニャ美術館、伊）、「六本木クロッシング」展（森美術館、東京）、06年「rapt!」展（メルボルン市内、豪）、07 年「『森』としての絵画:『絵』のなかで考える」（岡崎市美術博物館、愛知）、「是が非の絵画展」（大和ラヂエーター・ビューイングルーム）ほか。柴崎友香、長嶋有、名久井直子、福永信と同人誌を発行している（http://www.goningumi.com/）。昨年末にはタカ・イシイギャラリー京都の柿落としで個展を開いた。

「桂離宮」からすこし桂川をくだった川べり。染色工場の2階に法貴はアトリエを借りている。整頓された画材の向こうには、淀みない線描が身長を超える画面に踊っていた　Photo Kenji Morita

自身の表現へと昇華させるための研究を始めた。

「例えば、濃淡を色に置き換えることができますよね。また、線だけでなく地に色を与えることで、強く描いた線のほうが奥に引っ込むように感じさせることもできる（例えば赤地にグレーの線など）とか……。そういうプランがどんどんできて、今のようになってきたんです」。

試行錯誤を重ねながら導き出した細い道であり、ようやく形になりかけた法貴の新しいスタイルであったが、大学を出てから約10年経過して、発表する道はほとんど閉ざされていた。限られたわずかなチャンスが奇跡的に繋がったのは2002年。VOCA展に出品することになった。初めて多くの関係者の眼に触れ、東京で個展を開催する機会が生まれる。ある学芸員から受けた、「あなたは黒い線のことを考えるようになると思う」という予言めいた指摘が当たったのは、05年の個展だった。黒を、補色関係にある2色――例えば赤と青のような――と並行して用いる手法によって、観念的に表す独自のスタイルへと結びつくようになるのである。

2本の線を用いる描法は「二本画」の呼称によって、法貴の作品に独自な位置を用意することになる。それは、音からも類推されるように、「西洋画」に対比するようにわが国の伝統的絵画に付された名称と同じ音であり、ひいては新しい日本の絵画を唱えることにも繋がるであろう。それは冒頭にも触れたように、西洋画や日本画という伝統に対する訣別であると同時に、新しい伝統を生み出そうとする作家の意思表明とも聞こえる。さらには、法貴の創造した「二本画」は、新しい絵画を切り拓く可能性を秘めているのである。

●なかい・やすゆき［国立国際美術館主任研究員］

2月28日、京都・桂の作家アトリエにて取材